特59
943

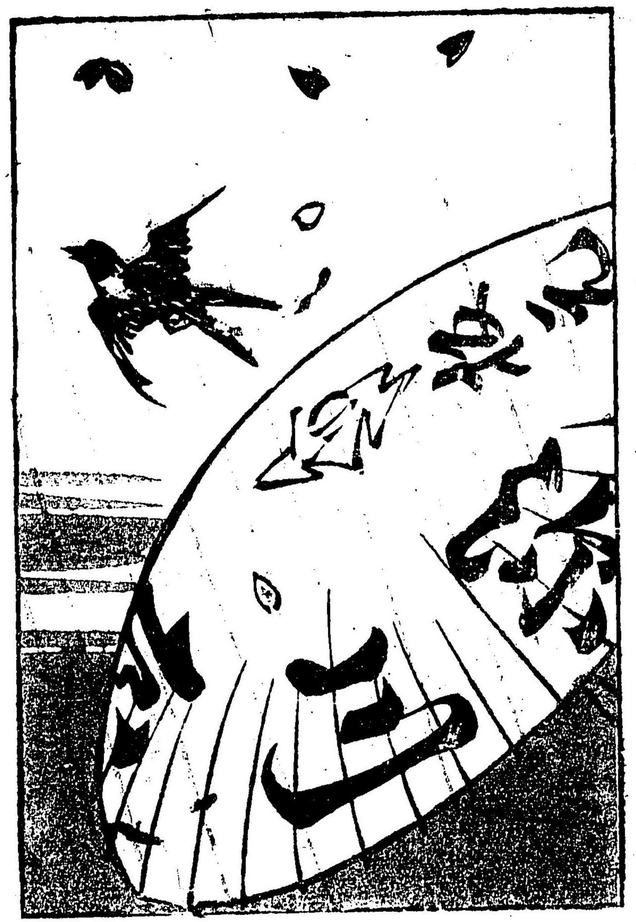
繪本
宝不

楠公一代記

全

金壽堂蔵
國政筆

四活刀



明治十九年十一月十六日内務省許可

第八分三七巳

楠正成

楠正成城塀を敵討
赤坂釣鐘を以て謀
兵圖

御醍醐帝
楠正成

後醍醐帝正成ヲ北条を討の綸旨を賜ふ圖

人皇九十五代後醍醐天皇の御守護
あるゝて楠正成とゝぶ英雄あり
その来由を尋るゝ楠の諸兄公
の後裔五品正純の
子なり世々河内の
国に住居を屋敷
の内に大なる
楠木なり

この故に国民よんで楠殿といへり
正純壮年にいたるまで子なきをうれひて妻に
かさる妻女やがて大和
国ゑぎさんの

毘沙門
天に祈
願して子
を授
けたまへ
と丹誠
をこらし
祈るなり
る夜堂中
ゆまどろ

夢中にさん
さの甲冑
をまそ

八方光明をてらし我口へ入と見て夢さめたり夫より口ばるらぬ身となり月満て男子をうめ正純よろこびて天王の御名を其まゝ

多門九と名乗し

心後聰明英智ゴシ

学問を好こと道理をきわむるを明らあり兵書に其こゝろを極めぞと云ふことゝ

なり武藝を

尊とゝ弓馬の達人その性質かゝゝ

ゝて平生怒の色なく言語分明ゝして

よく人を諭し仁心殊ゝ深く民をそ

と母の子をそ

が如し身の丈

五尺ゝあまり力ハ八人ゝさひす十大戈の時やをの軍兵数百を討ち

ちし首をとること十七

其後南朝に任へて屢々軍功を顕ハし天下無二の忠臣と名を末代に残し普く世人の知る処なり

正純の世に八尾と勝負をなす正成

新田義貞十六戦の時に八尾をうちきてより

以来領分も永く楠家のものとなれり

先祖より相傳の領知二千貫其上に八尾の方を切取らるゝを合せて三千七百余貫とぞ成

りける正慶元年天皇大塔の宮を召れ鎌倉の北條悪逆日々

増長し誰然
既に今
高時の無
道の振
舞上下
是を怨む此故
に諸国の武
士を集め高
時を不ろぞさんと
思ひ之に向ける大
将八

楠正成と申名将あり と奏す是
より正成を
召れろる
正成行
在て至
帝大
に悦
たま
ふ

正成詔を
うけ拝辞
して還り赤
坂城ク
是より
北條と大
に戦
ひ終に
朝敵討ろ
ぼし京師を
復ス
車駕京都
に帰る去程
小大塔の宮へ
兼て足利兄

弟いんぶうの志ありと
さつし此支奏門すと虽も
許あらしろべひそろ
こ計うみふ処尊
氏の弟忠義是
をきゝ
尊氏に
計り宮
を誘す帝
宮を△
渕辺彌貫守

△宮中こ生捕せみひ
後忠
義こ頂
みふ
忠よ
鎌
倉
こ供
奉り

宮主字
こ押こめ
家臣
渕
辺伊賀
守こ命
じ終ひ
殺

天下の
支を
議
藤ふ
さゝ曰
く此支
大塔宮
ちと口

忠義ゞ無道悪む可しとて、こ万里小路藤房
奉る
郷つくゞ天下の支を案じみひ正成を招き

忠義
鎌倉供一奉るよ
宮の不義の御心
預け給ふ
勤王の心深く
此る
忠義らせ
宮を
よふ
へ何人う
隠謀の企ある
もの〳〵詭奏よるもの
そでよ世の
我
乱る〳〵元
思ふよ天

下の政権へ足利よ定るまん
今天下の武士君を
怨る者多し
殊よ
新田義貞君を
怨む吉ヌあるるれば
尊氏天下の権を
執へ義貞朝敵と
あり新田天下の
権氏又
を執れば尊
朝敵とあん

某苟も此危きを助けんと
思へども時の然らしむるまゝ詮方
なし天下又武家のものとなるべ
べんべん人〻天下無双
の名将にて数名計ち
奉るの忠臣金鉄
の英雄なれども
人〻皆こび侯ふ
足利は心をよせ軍功少
といへども将軍に任ず

四ケ国
大国
をまてみゝ

べへんの言葉を
帝も〻ゞめ百官の人〻
用ひるゝふに於ては
むわんのとも〻ぞら
何わどあるとも天下
へ安泰なれども
皆さま〻〻の
依姑ひいきを
然れば忠臣の武士ありとも
何の為にか分骨を尽さんや
今べへんの申されたる討死
とへ始終そめづにあさう
なることを申されさるなる
我朝前後にまき名将を失ふ

明治十九年十月十一日御届
編輯兼出版人 浅草区元町十番地 牧金之助